

一戸 れい (いちのへ・れい)

1、プロフィール

詩人。介護施設弘前リカバリーセンターにて車椅子での不自由な生活を送りながら、詩作を続ける。平成 25 年、84 歳から 3 年余りに 6 冊の詩集(私家版)を発行した。

<生没>

1928(昭和 3)年 4 月 4 日 ~ 2017(令和 29)年 1 月 26 日

<代表作>

詩集「第一詩集 車いす生活の四季こもごも」(平成 25 年)。以下、第二詩集から第六詩集までを発行した。

<青森との関わり>

弘前市出身。詩人一戸謙三の長女。弘前リカバリーセンターに入所中、センターの先生の誘いがあり、詩作を志すようになった。

2、作家解説

昭和 3 年 4 月 4 日、詩人一戸謙三の長女として出生。

敗戦の直前まで弘前市山道町で過ごす。私立柴田女子実業学校本科二部、同校一種専攻科に進学したが、土淵川付近の強制疎開により、母の実家がある森田村下相野に疎開する。戦後、森田村立育成小学校を振り出しに、木造町立菊川、柏村立柏第一、木造町立向陽、森田村立森田小学校などの小学校勤務を経て、平成元年に定年退職する。

平成 12 年、「脳梗塞」の病に倒れる。南津軽郡碓ヶ関村黎明郷リハビリテーション病院で、治療・療養に努めた結果、車椅子での日常を余儀なくされたが、幸運にも利腕の右手、脳の機能が回復する。翌年、弘前市高田にある弘前リカバリー

センター(以下、センター)に入所する。同 22 年、センターの先生の誘いがあり、詩作を志すようになった。

「このリハビリセンターに／入所して十年になる。／わたしの一生もここで終わりになるのか／と思うと 淋しくなる。／しかし百人近い人たちと／朝、昼、晩、夜を過ごせることを考えると／幸せな人生と言わねばなるまい。／今八十四才になって考える／人生とは なんだろう。／そこでわたしは、人生になにをおくり物／をしたらいいだろうと考える。／そこで八十二才より詩をかき始める。／人生とは なんだろう。／人生へのおくり物とは／生きていくことだと思う。」〈第一詩集「人生へのおくり物」〉

「父はよく はがきを書く。／しかも 上段、下段と／細かい字で 書く。／はがきの まわりのあいてる所にも／書く。／わたしの叔父がよく／「郵政省 なかせだな」／と冗談をいったものだ。／しかし正式な物を書く時は、／楷書で書く。」〈第二詩集「はがきに書く父」〉

82 歳を過ぎた頃から、センター内での不自由な生活空間で詩作を続け、同 25 年から、三年余りに六冊の詩集(私家版)を発行した。

同 29 年 1 月 29 日、センターで死去。享年 90 歳。